

## 柔らかな心

渡部 美智子



頷が遺憾なく發揮される。

ボールを抱えている幼児に、「お母さん、卵を温めているね。あつ、かわいいあかちゃんが生れました」卵の割れる擬音を出す。即、変身。小鳥のあかちゃんになって飛び回る。演じているのではなく、心は完全に小鳥になりきっているのである。

彼、彼女等のキラキラ輝く無邪気なひとみを見ていると、未熟な幼児、成熟した大人と単純に割りきれない思いが強くなってくる。

長瀬幼稚園に転動して一年半。長年、園児とつきあい、幼児の行動特性に慣れているはずなのに、日々新たな発見に驚き、感動し、幼児の純な心がうらやましくなる毎日である。

何ものにもとらわれない柔らかで自由な心は、どのような環境にも敏感に反応し、積極的に遊びを作り出す。遊びの創造においては、まさに天才である。

長方形の小さな紙にハサミを入れ、折り目をつけただけでうさぎになり、折り加減を変えるだけでくわがた、丸めてかたつむりと、まるで手品師のよう。形はごく単純なのに、よく特徴が表現されているのである。

完全に脱帽。教えるものと教えられものの立場は逆転してしまう。

ごっこ遊び、劇遊びでも、幼児の本

## 今昔

谷中 三夫



「今の子どもたちは、遊び方を知らない。食べ物でも、季節を問わず店先に並べられ、季節感覚がなくなっている。ナイフで鉛筆も削れない」

「昔は、本当によかった」と、よく言われる。

確かに、私の子どもの時には、季節折々の遊びもし、野山を駆け回っては木の実でポケットを膨らませ、友だちと分かちあう。木を切り、竹を切っては遊び道具を作り、完成した時の喜びを味わう。田植え、稲刈りをして、働くことの尊さをも知った。

中学生の時にスケートの上手な男の先生がいた。先生は本物のスケート。我々は、先生から教わって作った竹のスケートを持ち、氷の恐ろしさを教えられて、川、堤に氷滑りに連れていかれた。スイスイ滑り回る先生の格好よ

さ。本物のスケートを借りた時の喜びと、靴のぬくもりは、今でも忘れられない。

これら一つ一つがみな楽しい思い出であり、自分の心をはぐくんできたように思う。

高度経済成長が続いている現在、子どもたちは、新しいものに興味と関心を持ち、生活の場に取り入れ、遊びのリズムをつくっている。

確かに、我々の幼なかつた日とはかなり異なっている。本来の遊びは、複数でつくり出し、その中で、社会性、創造性を身につけていくはずなのに、孤立化している子どもたちの遊び…。

こんな中で、「今の子どもたちは…」「昔は…」などとはかりは言っていない。

今、子どもたちは、「一日も早く、大人たちが頭を切り替え、人間らしい生き方を教えてほしい」と叫び、強く求めているような気がする。

特にこれからの社会は、科学技術が著しく進歩、情報化と国際化の進展、人々のもつ価値観の多様化など、あらゆる面で、広範囲に急激な変化が起こってくるであろう。このように急変する二十一世紀の社会に生きていく子どもたちのために、私たちのなすべきことは何かを考え、新しい技術を取り入れながら、基礎的・基本的な技能を確実に習得させるとともに、一人一人の能力適性・興味・関心などに応じた教育を行い、主体的に変化に対応でき